

大量生産、大量伝達を社会背景とした



ウォーホル「マリリン」高松市美術館所蔵



1960年代の美術を探る。



現代絵画の一断面 | **くり返しの構造展** | '89・2・4(土) → 2・26(日) | 開館時間: 午前9時 → 午後5時(入室は午後4時半まで)
休館: 月曜日 | 入場料: 一般500円(400円)/高・大生300円/小・中生100円 ()内は前売/団体20名様以上2割引



1.



2.



3.

●現代絵画の一断面「くり返しの構造展」

1962年アメリカでは、大量生産、大量消費、大量伝達に象徴される大衆文化の中で、ポップ・アートがその幕開けを告げました。ウォーホル、リキテンシュタイン、ローゼンクイストなどがいっせいに個展を開き、都市環境における大衆社会のイメージを積極的に取り上げたのです。一方日本においても、1960年の池田内閣の成立とともに所得倍増計画がうちだされて高度経済成長期、量産社会へと移行し、テレビの台数も500万台を突破するなどまさにマス・メディア時代の到来が告げられました。このような大量生産、大量消費をくり返す社会を背景として、美術においても同一単位がくり返され増殖していく構造を持つ作品が生まれてきました。ワッペンを規則正しく配列した磯辺行久の作品、三木富雄の増殖する耳のイメージ、石膏の粒で画面を埋めつくした伊藤隆康の作品、桑山タダスキの同心円、阿部展也のコルクを敷きつめた作品など、特徴的な作品が次々と制作されたのです。

この現代絵画の一断面「くり返しの構造展」は、アメリカの大衆文化からくり返しの構造を引き出した典型的な例としてウォーホルのシルクスクリーン作品をとりあげ、日本における作品と比較することにより、絵画におけるくり返しの意味を導き出そうとするものです。

●常設展のおしらせ

1月6日～4月9日

《常設展示室1》

・戦後日本の現代美術

1950年代に自由な創作活動を目指した団体がいくつか現れましたが、その中でもひとときわ創造的な活動を行った、〈デモクラート美術家協会〉、〈実験工房〉とその周辺の作家たちに焦点を当てています。

・20世紀世界の版画

重要なシュールリアリスト(超現実派)の一人であるドイツ出身の作家マックス・エルンストの代表作「博物誌」を、前期(1月6日～2月19日)、後期(2月21日～4月9日)にわけて展示します。

《常設展示室2》

・漆芸

江戸時代末期の玉楮象谷を祖とし、その一門から明治・大正期の名工たちに引き継がれ、人間国宝の磯井如真・音丸耕堂らによって新しい展開をみせた讃岐漆芸の流れを、時代をおって展示しています。

・金工

工芸家のグループ「无型」、「工人社」で活躍し、近代工芸界の改革を推進した北原千鹿の優れた金工の数々と、その金工下絵を紹介します。

●次回の展覧会

木村忠太回顧展

3月4日(土)～3月26日(日)

—昨年パリで死去した高松市出身の国際的作家・木村忠太の画業を系統的に展示する、国内最大規模の回顧展です。

(くり返しの構造展出品作品より)

1. 磯辺行久 「WorK」
2. 伊藤隆康 「無限空間 8-64」
3. 三木富雄 「Ears No.201 1965」
4. 桑山タダスキ 「円 D135」



4.

高松市美術館

〒760 香川県高松市紺屋町10-4

☎ (0878) 23-1711

☎ (0878) 23-1500〈テレフォンサービス〉